

世界紀行文学全集

6

イタリア・スイス

# 世界紀行文学全集

## イタリア・スイス

6

志賀直哉 ● 佐藤春夫 ● 川端康成 ● 小林秀雄 ● 井上靖

ほるふ出版

世界紀行文学全集 第六卷  
イタリア・スイス

監修

志賀直哉・佐藤春夫・川端康成・小林秀雄・井上靖

発行日

昭和五四年九月一日 発行

発行所

株式会社ほるぷ出版

東京都新宿区新宿二一九十三 電話(〇三)三五四七〇三二(代)

代表 中森時人

総発売元

株式会社ほるぷ

東京都新宿区新宿二一九十三 電話(〇三)三五六六二二一(代)

製作

東京連合印刷株式会社

目

次

本間 久雄  
 藤森 成吉  
 福原 麟太郎  
 市河 晴子  
 林 芙美子  
 東山 魁夷  
 横光 利一  
 武者小路実篤  
 桑原 武夫  
 麻生 三郎  
 野上 豊一郎  
 野上 弥生子  
 深尾 須磨子  
 荻 須 高德  
 裕 伊之助  
 志賀 直哉  
 土方 定一  
 湯川 秀樹  
 小泉 信三

イタリア

|             |    |              |    |             |     |
|-------------|----|--------------|----|-------------|-----|
| アルノ河……      | 九  | 中世紀の古都シエナ……  | 一〇 | アッシジ……      | 一三  |
| ゴルキイを訪う……   |    |              |    |             | 一四  |
| ナポリ出港……     |    |              |    |             | 一八  |
| 永遠の都ローマ……   | 二〇 | ナポリからベニスまで…… |    |             | 二五  |
| ナポリ小景……     |    |              |    |             | 三一  |
| 伊太利……       |    |              |    |             | 三二  |
| イタリアより……    |    |              |    |             | 四〇  |
| 伊太利の旅……     | 四四 | ナポリ・ポンペイ……   | 四九 | ミケルアンゼロ其他…… | 五六  |
| キイツの墓……     |    |              |    |             | 五九  |
| パドハ……       |    |              |    |             | 六一  |
| パラティノ……     | 六三 | エトナ……        |    |             | 六九  |
| ナポリからローマへ…… | 七四 | ローマ……        |    |             | 八〇  |
| 伊太利の女性……    |    |              |    |             | 一一八 |
| ゼノア……       |    |              |    |             | 一二四 |
| ローマにて……     |    |              |    |             | 一二六 |
| 伊太利にて……     |    |              |    |             | 一二八 |
| エトルリア遺跡……   |    |              |    |             | 一三一 |
| イタリアの夏……    |    |              |    |             | 一三五 |
| イタリア……      |    |              |    |             | 一三六 |

谷川 徹三  
中川 一政

吉田 秀和  
大岡 昇平  
竹山 道雄  
富永 惣一  
梅原竜三郎  
川端 康成  
大仏 次郎  
ヴァチカン

柳 宗悦  
中川 一政  
田中耕太郎  
サンマリノ  
大宅 壮一  
スイス

|                         |     |
|-------------------------|-----|
| ペスツムの半日……………            | 一四二 |
| ラヴェンナのモザイク……………         | 一四三 |
| ボロボロの辻……………             | 一四四 |
| 日本の殉教者……………             | 一四五 |
| エトルスク……………              | 一四六 |
| ボンベイ遺跡……………             | 一四七 |
| スペイン広場……………             | 一四八 |
| アシジのジオット……………           | 一四九 |
| フロレンス……………              | 一五〇 |
| ヴェニス……………               | 一五一 |
| トルチェロのモザイク……………         | 一五二 |
| マンテナ……………               | 一五三 |
| イタリアのオペラ……………           | 一五四 |
| イタリア紀行……………             | 一五五 |
| イタリアめぐり……………            | 一五六 |
| ビエンナーレ国際美術展……………        | 一五七 |
| ローマからナポリへ……………          | 一五八 |
| ヴェニス……………               | 一五九 |
| ローマの休日……………             | 一六〇 |
| ローマ付近……………              | 一六一 |
| ヴァチカンの本堂とカルチェリーの僧庵…………… | 一六二 |
| ヴァチカン王国……………            | 一六三 |
| 平和の教皇……………              | 一六四 |
| 人口一万五千の独立国・サンマリノ……………   | 一六五 |

姉崎 嘲風  
三宅 兄己  
徳富 蘆花  
愛子  
林 久男  
柳田 国男  
阿部 次郎  
成瀬 無極  
矢代 幸雄  
斎藤 茂吉  
茅野 雅子  
土岐 善麿  
市河 晴子  
和田 三造  
東山 魁夷  
久松 潜一  
横光 利一  
武者小路実篤  
山口 青邨

|               |    |
|---------------|----|
| 我れやいづこの記      | 三三 |
| 瑞西国ゼネーブ       | 三三 |
| ジュネーヴ         | 三三 |
| モントルー         | 三四 |
| ツェルマツト        | 三四 |
| ベルン           | 三五 |
| 瑞西の山と水        | 三五 |
| スイスにて         | 三五 |
| ルツェルンの春       | 三六 |
| 謎の女           | 三六 |
| アルプス出中        | 三六 |
| リギ山上の一夜       | 三六 |
| ルツェルンの夕       | 三六 |
| 四林湖の一夜        | 三六 |
| ユングフラウを見に     | 三六 |
| スイスを廻る        | 三六 |
| 吹雪の溪谷を縫うてスイスへ | 三七 |
| 銅版画中のベルン風景    | 三七 |
| モントルーの古城      | 三七 |
| 葡萄園の主人        | 三七 |
| スイス           | 三九 |
| スウィス日記        | 三九 |
| スウィス行         | 三九 |
| ルチェルンより       | 三九 |
| バーゼルにて        | 三九 |
| 山も人も懐し        | 三九 |

|                  |                    |    |
|------------------|--------------------|----|
| 野上豊一郎            | 吹雪のユンクフラウ……………     | 三三 |
| 野上弥生子            | スウィスの断章……………       | 三九 |
| 谷口吉郎             | せせらぎ日記……………        | 三九 |
| 笠信太郎             | 村のロメオ……………         | 四〇 |
| 萩須高德             | スイスだより……………        | 四〇 |
| 大内兵衛             | ベルン人の生活……………       | 四一 |
|                  | ブ……………             | 四一 |
| 芹沢光治良            | スイスの旅……………         | 四二 |
| 加藤周一             | スイス・ヨーロッパの合衆国…………… | 四三 |
| 小泉信三             | スイス……………           | 四三 |
| 高橋健二             | リルケの跡をたずねて……………    | 四七 |
| 手塚富雄             | サン・モリッツの旅……………     | 四三 |
| 竹山道雄             | スイスにて……………         | 四七 |
| 山根銀二             | トーマス・マン会见記……………    | 四九 |
| 堂本印象             | 画と文……………           | 四九 |
| シエナのパラッツォ・ビュブリコニ | シエナの街筋……………        | 五二 |
| シエナの宿の朝……………     | 五二                 |    |
| シエナの裏町……………      | 五二                 |    |
| シエナの道……………       | 五二                 |    |
| フィレンツェの街……………    | 五二                 |    |
| ベルジア……………        | 五二                 |    |
| アレツツォ……………       | 五二                 |    |
| バドヴァ……………        | 五二                 |    |
| タルキニア……………       | 五二                 |    |
| ジュネ……………         | 五二                 |    |

岡本 一平 画と文

瑞西山中之景 二五 瑞西首都チューリッヒ 二六 阿尔プス遠望 三〇 独と瑞の国境 三一 ライン河 三九 湖畔の晩饗 三四

執筆者・出典一覧…………… 三六

地 図 イタリアとスイス、スイス、ジュネーヴ…………… 卷末（折込）

イ  
タ  
リ  
ア  
・  
ス  
イ  
ス



## アルノ河

本間 久雄

フロレンスに来て第一に気づくことは、その町の古色蒼然たることだ。道幅はせまく、道には切石が敷きつめられ、その両側には、石の建物<sup>建物</sup>が聳<sup>そび</sup>えている。道幅の狭い点から言うと、倫敦や巴里の裏町のような感があるべき筈だが、それでいて、それとは全然趣きを異にし、落ちついていて、古めかしく、ゆかしい感じを与えるのは、流石に文芸復興以来の古都だからである。

私はラスキンの『フロレンスの朝』を手にして、そこに書かれたサンタ・クローチェやサンタ・マリア・ヌベラ等の古寺を、一々実物に对照して見て歩いたり、ウィッチーやピッテの画廊をめぐるたりした。その日の夕暮に近いころ、町の東南部を東から南の方へ流れるアルノ河の畔に出た。時は寒い二月の始めであったので、川の面には氷が張りつめていた。そしてところどころの水の切れ目から、どんよりした川面をのぞかせていた。私は、まずこの川に架けられたヴェツキオ橋という古い橋に立つて見

た。橋には、ウィッチ画廊とピッテ画廊とを繋ぐ廻廊<sup>回廊</sup>があつて、この廻廊の両側の狭い道路には、貴金屬商や古物商や骨董商などが大道店を出している。古い都だけに、何となくあたりにふさわしい感じである。次に私は、少し川下のトリニタ橋に立つて見た。この橋こそはダンテ



トリニタ橋

の恋の伝説とは切っても切れない関係の橋だ。

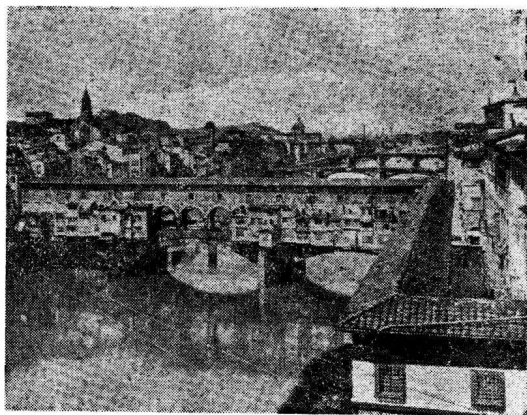
ダンテが、彼れより一つ年下のビアトリスに始めて逢つたのは彼れの九歳の時、饗宴に招かれて、彼れの父と共にビアトリスの家に行った時であった。彼女はそれ以後、彼れの心には永えの喜びと悩みとを与える種となった。「吾が心の光栄あるあてびと」として、彼れの死ぬまで

彼れは、この少女の真紅の衣を身に纏うた愛らしい姿を、彼れの心の中から忘れることが出来なかつた。彼れが二度目に彼女に逢つたのは、それから九年後であつた。彼れの自叙伝である『新生』には、この時のことがこう書いてある。

「それから九年目の終りの日に、この光栄あるあてびとは、彼女より年かきの二人の貴婦人に伴われ、純白の衣を身に纏うて再び私の前に現われた。彼女は、街上を通りすぎるとき、いたくも恐れおののきながら佇んでいる私の方へ目を向けた。そして、言葉で言い現わしがたい懇懃<sup>こんそく</sup>さで私に挨拶をした。その懇懃なさまはその瞬間に私をして幸福のありたけを味わわたほどであつた。」

そしてこの二度目の出逢いのこの「街上」というのが、伝説によると、このトリニタ橋の南端の袂<sup>たもと</sup>なのだ。

尤もビアトリスは、実際の人物でなく、ただダンテの想像中の人物だという学者もある。見様によつてはそう思われぬこともない。というのは、ビアトリスは余りに靈的な、この世ならぬ女性として取扱われているからだ。前に引合に出した『新生』の中で、ダンテが、ビアトリスの死んだのを夢みた場合にも、太陽は光を失い、星は青白く輝き、飛んでいる鳥は地に落ち、大地は鳴動すると書いている。つまり、ビアトリスの死によつてこの世界が、キリストの死と同じ現象を呈したわけだ。実際ビアトリスは、それほど非現実的な女性として描かれている。しかしそれだからと言って、彼女を非實在



ヴェツキオ橋

## 中世紀の古都シエナ

フロレンスに來たついでに、私はシエナを一瞥しようと思つて、朝の八時の汽車に乗った。

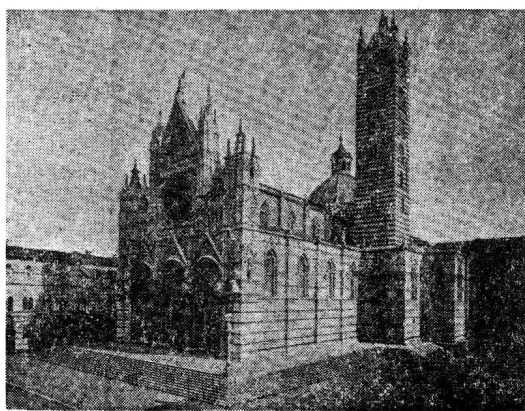
シエナは伊太利の中部タスカニーの諸都市の中でも、最も中世紀の面影を伝えた古い町だと言われている。フロレンスに文芸復興期の面影を偲んだ私は、急に思い立って、更に中世紀の面影をシエナに偲ぼうとしたのであった。

フロレンスからシエナへの汽車の旅は、私には愉快であつた。汽車そのものは、古びて、薄汚なく、田舎のガタ汽車であつたが、却つてそれが、シエナのような古い町を訪ねるにはふさわしいようでもあり、又何となく日本のどこか田舎の汽車にでも乗っているような心安さが感ぜられた。私は、私以外に人のいない一室の一隅に腰を下して、見るともなしに窓外の景色を眺めた。ここいらはタスカニーの平野とは言つても、アペニン山脈の裾のつづきであるだけ、あちらにもこちらにも小さな山や丘が起伏している。そしてその山の中腹や丘の上には古めかしい田舎家が、まばらに生えた糸杉や松などの間に点々している。時は二月の初めであつたから、大方の樹々は皆、落葉して、山も丘も、赤黒い地肌を露わにしている。が、もし、これが春から夏にかけてであつたなら山も丘もしたるような翠緑に掩おほわれるであらう。と、思う

と、フロレンスのリツカルディ宮殿で丁度見たばかりのベノゾ・ゴッツォリの『博士達の行列』の図が心に浮ぶ。今、眼の前に展開されつつある田舎道が、いかにもこの絵の中の田舎道に似ていたからであつた。

午前の十一時頃シエナに着いた。

シエナは大きな丘の上に城壁で囲まれた町であつた。町の中は凸凹して或いは谷間のように低くなつたところに一塊り、又、そのスロープの松柏や橄欖の樹などの一叢繁つている中腹に一塊りというように家が建てられてゐるが、町の中心をなす重なる街道は丘の上にある。街道は石だたみの狭い道で乱雑に右往左往して居



シエナの大伽藍

的な女性とするのも早計だ。ダンテの時代は、エミール・ルカがその名著『恋愛の進化』の中で論じているように、所謂「女性神化時代」であつた。自分の恋の対象を神として尊崇した時代であつた。だからダンテが、ビアトリスを神として、天上界の人物として描いたのも無理ではないであらう。

私はそんなことを考えながら、このトリニタ橋の上に佇んでいた。夕靄がすっかりあたりをこめるまで、いつまでも。

り、その道の両側には中世紀の名残をとどめている古めかしい石造りの余り高くない家が並んでいる。街のこの古色を帯びた感じはフロレンスに似ているが、フロレンスがアルノ河を控えた平地に築かれた町なの比べて、このシエナは山間僻地に築かれた町なので、町全体の雰囲気は余程違っている。フロレンスの明るく華やかなのに比べてシエナは灰色で淋しい。近代都市文明から離れている点は同じだが、フロレンスの方は、文芸復興の発祥地としての誇りから、故意にそれを拒絶しているに比べて、シエナの方はそれに追隨したくても出来ないで、取り残されたというような果敢ない感じである。

シエナの町で見たものの中で、特に取り出してここに記して置きたいと思うのは、パラッツォ・パブリコ(市庁)の寓意画とドオーモ(大伽藍)の二つである。

パラッツォ・パブリコは十三世紀の終りから十四世紀の始めにかけて造られた四階建のシエナ共和国の全盛期を記念する大きな建物で、美しい塔が高く空中に聳えているのも偉観だ。この四階に上り、南の方ははるかに展けたタスカニの平地を雲烟の間に眺めたのも、私に取って忘れたくない印象であったが、何よりも嬉しかったのは、アンブロジーオ・ロレンゾの有名な善悪政府の寓意壁画をここで見たことであった。

画は、大きな細長い部屋(三方の壁一面に描いてあって、真中の南の方には「善い政府」、それに向って右の方の西の壁にはその善い政府が

自然に廣がる一國の繁栄の諸相が描いてあり、向って左方の東の壁には「悪い政府」とその齎らす一國の衰頹の状態が描いてある。全体に大分剣落し磨滅し、殊に東の壁の方がひどくなっている。中央の「善い政府」がそれでも比較的に



シエナのパラッツォ・ピュブリコ

堂本 印象

カンポ広場に立つ煉瓦造りの宮殿は、十三世紀の始めに建てられたものだが、今は市庁になっている。その右端には、百二メートルもある高い塔が聳えていて、これも時計台になり変っている。

その前のカンポ広場では、七月二日と八月十六日にボリオという祭があり、古代風俗(といっても十四世紀の風)をした若ものたちの数個隊や騎馬武者の行列が出て、最も絵画的な光景を呈する。広い広場も、さすがに市民で埋めつくされるという。市庁にはコンシグリア堂があり、立派な壁画や、シエナ派の始祖ロレンゼッチ、マルチニ、ソドマ等のフレスコがあるので有名である。

よく保存されている。

画は向って右手に、年配いた巨大な人物が絨氈の椅子に腰をかけ、右手に長い笏を持ち、左手に円い花印を捧げている。この人物はシエナの君主又は国家を象徴したものだそうである。その左手の花印には、聖母が二人の天使に挟まれている。彼れの足の下には、伝令使の徽章である牝の狼が蹲っていて、ロムラスとレムスの二人の子に乳をやっている。彼れの後ろには六人の女性が並んでいる。これは六つの「徳」を象徴化したもので向って右から左へかけ、「正義」「節制」「知恵」「慎慮」「忍耐」及び「平和」という順序である。又彼れの頭上には、神学上の三つの徳、即ち「貞操」「希望」「信仰」という順序で、翼のある女性の姿をして飛翔している。彼れの足の下向って右の方には多くの武士が、或いは馬上で、或いは徒歩で、槍を立てて厳然と構えている。その下には、鎖につながれた一群の男女があつて、これは捕虜であることを示している。次に画面の左方から二十四人の市民が一つの綱をたぐるようにしてぞろぞろと、この巨人である君主の方へ進んで来る。そしてその綱の一端を君主はここの笏を持った右の手に持ち、更にその他の一端を「協力」を象徴化した画面左端の女性が持っている。この「協力」の女性の持っている綱は更に二つに分れて、その丁度上に端然と坐している女性「正義」の両側の二人の天使の手に結びつけられていて、向って左方の天使は「分配の正義」で、跪いている一人の男に王冠を冠らせ他の一人の男

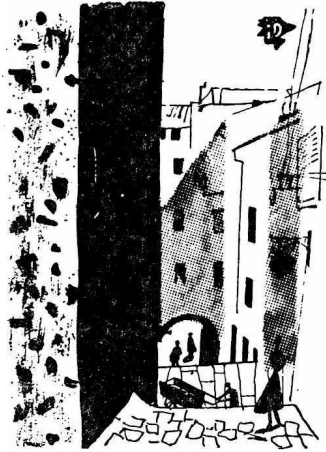
の首を刎ねて居り、向つて右方の天使は「交易の天使」で跪いている一人の女の鉢に黄金を与え入れ、又一人の男に武器を与えている。そしてこの「正義」の女性の真上に翼のある「知恵」の女性が天がけりながら、「正義」の女性の頭を中心に、上述の二人の天使を天秤にかけている。つまり「知恵」と「正義」と「協力」とが「善き政府」には、如何に重大であるかということ象徴しようとしたのである。

西の方の壁の、「善き政府」の齋らす世相の描写は、二部に分け、その頃のシエナの日常生活を描いたものというのだが、一部は城壁や宮殿や教会の円蓋などの美しく建てられた都の中で、さまざまな階級の人が楽しげに労働にいそしみ、他の部では城外の田園で、耕作や遊猟や旅行などの楽しげな生活が描かれている。

「悪い政府」の方では、グロテスクな武装をした「暴君」が「悪意」「詭策」「残忍」「戦争」「怨恨」等の多くの「悪徳」を従えて、「正義」を足下に踏みにじっているところが描いてあるが、惜しいことに剣落が甚だしく、僅かに面影を偲ぶばかりである。

これらの寓意画は一三三八年から一三四〇年の間に描かれたものとなっている。人物の顔や表情等が、夫々個性的な特徴を備えているし、全体の構図の均整調和を重んじたところに古典的な味もあつて、絵そのものとしても面白いものであるに相違ない。しかし、今日の吾々から見ると、これらの絵の第一の興味は、その当時の思想や、制度の理想やを表象したところに

ある。ジョン・アデングトン・サイモンズは、この頃の時代を評して「それは寓意と象徴主義の時代で、詩人や画家は、争つて当時の思想や感情を人間の形において人格化しようと努力し



シエナの街筋 堂本 印象

シエナの街は、煉瓦の街といつてもいいくらいに、煉瓦造の家ばかりである。お寺も、宮殿も、それを用いている。また塔も多い。中でも、パラツォ・ピュブリコのそれが一ト際高く聳え立っているが、カテドラルの塔は、白と黒と赤の色大理石で、上から下までダンダラ編で建て上げられている。お堂の中の列柱や穹窿も、同様の異彩を放っている。

煉瓦造の建物も、数度の攻撃によって破壊され、今でもそのままにあがが残っている。街は、大小さまざまな丘陵の間にはさまれ、起伏が多く、道路も高低区々であるから、道を歩くには苦しいけれども、見るのには大へん趣きがある。街はずれにはイタリー特有の糸杉がきれいに芽をふいてい

た時代だ」と言つたが、蓋し、これらの寓意画は、そういう時代の代表的産物であつた。そういう文化史的記念として、私は特に忘れがたい印象を受けたのであつた。

十三世紀の建立にかかるドーモ（大伽藍）は大きく美しい大伽藍だ。フロレンスのサンタ・クロッチェの伽藍も美しいが、このシエナのドーモの方は一層けばけばしい美しさだ。正面は白と黒又は濃い緑、灰色がかつた赤などの大理石のモザイクになつていて、唐草模様式の細かなさまざまな彫刻が施してある。本堂も正面にふさわしい白と黒との大理石をだんだんにした柱の並立した具合や、長押や天井の装飾の具合や敷石のモザイク式な絨氈と見紛うような装飾の具合まで華麗を極めている。それだけ、莊重沈鬱の趣にいささか欠けている。

尤も、伊太利の大伽藍が、この莊重沈鬱な点では独仏その他の純粋なゴシックに劣っているということは定評であつてここに贅するまでもない。しかし美術史家リュブケの言っているように、もと暗鬱な北欧を背景として生れたゴシックが伊太利に這入ると、伊太利の明澄な自然が軽快な国民性の影響を受けて、おのずからそこに違つたゴシックとなつて現れた。シエナのこのドーモの如きその代表と言われている。その意味で私は、このドーモに特殊な興味を覚えたのであつた。

その日の午後四時、私は再びフロレンスへかえる汽車の中の人となつた。

## アッシジ

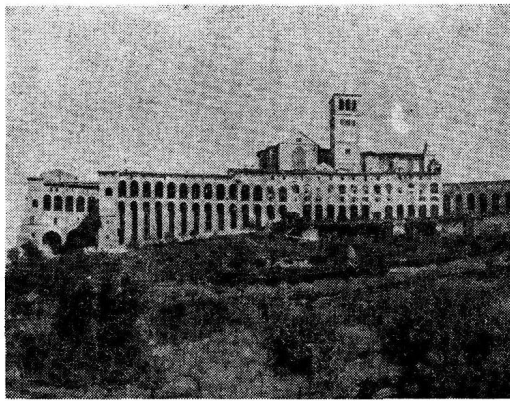
フロレンスから羅馬への途を、すこし廻り道をして私はアッシジに立寄った。アッシジの聖フランシスの寺を見たいためであった。

アッシジの聖フランシス——この名は不思議な魅惑を常に私たちの心に齎らす。聖フランシスは、アペラールとは別な意味で文芸復興の夜明けの鐘をついた人であった。アペラールが峻烈な理性の光を通して人間性を中世の暗闇から解放しようとしたのに対して、聖フランシスは、純真無垢の感情の流露を恣にするることによって、それを試みようとした人であったからだ。

聖フランシスは詩人であった。単に人間を愛したばかりでなく、更に自然を愛し草木を愛し、更に禽獣を愛し、更に無生物である石を愛し、雲を愛し、火を愛し、水を愛した。すべてのものが、彼れに取って、神の恩寵の現れであった。聖フランシスが、小鳥に道を説いた伝説は余りにも有名になっている。

彼れが友のセラノのトマスと一しょにスポレトの谷間を通るときであった。行手の道にさまざまの鳥——鳩、鳥その他の鳥が群っていた。ふだんからそういう鳥類に特別な愛を感じていた彼れは、それを見ると、トマスを後ろにのこしたまますぐさまその方へ走って行った。鳥の

群はあたかも彼れを待つてでもいたように、じつとして飛び去らなかつた。彼れは非常に喜んだ。そしていかにも謙虚な態度で神の言葉に耳を傾けるように彼等に頼んだ。「兄弟たちよ。お前たちは造物主を讃えなければならぬ。造物主は、お前たちに、身体をつつむために羽根を与え、



アッシジの聖フランシスの寺

え、空を飛ぶために翼を与え、又、お前たちの必要なすべてのものを与えた。造物主は動物の中でもお前たちを高貴なものとして造つて呉れた。そしてお前たちのために清い大気の中でお前たちの家を用意して呉れ、お前たちが種を蒔き、実を刈り取るわずらわしさをしなくとも、お前たちを保護して呉れる」——彼れのこう語

つたのを聞いて、小鳥の群はいかにも感動したような様子で、或いは首を延べ、或いは翼をひろげ、或いは嘴をひらいて彼れを仰ぎ見た。彼れはそのマントルで小鳥の頭や身体をやさしく撫でながら、彼等の中を分けて歩いた。それから彼れは、彼等のために祈を挙げ、十字を切つて、やがて彼等を飛び去らせた。

こういうお伽噺めいた彼れの伝説も、すでに教会が型に墮して、すべての純真な感情の発露が閉ざされていたその時を思い合せるとき、そこにお伽噺以上の重大な意義があるのではないか。そこにこそ尚今日の私たちの魅力を感じるあるものがあるのだ。

アッシジは伊太利の田舎町によく見るように、小さな山の頂から裾野にかけて展開された田舎町であった。聖フランシス寺は、丁度この山の頂に建てられた寺であった。寺は十三世紀の半に建てられたものとのこと。外観のひどく簡素なものは清貧を友としたこの聖者の紀念的建物としては至極ふさわしい。又、リュブケの例の『美術史』によると、この建物は、従来伊太利のバシリカ式な寺院建築に北方ゴシックの影響の見え始めた最初の代表的建築として、建築史上最も重要なものだと言うことだ。いかさま、フロレンスのサンタ・クロッチェ寺やシエナの大伽藍など——ゴシックの影響を完全に認め得る他の伊太利の諸寺と比べると、すっかり趣きがちがつて、簡素で、どことなく古色を帯びている。

私がこの寺で、フランシスカン派の僧侶たちの管む朝の勤行に侍し得たのは、私には忘れがたい印象であった。私はこの寺で打ち出す午前五時の鐘と共に起きて、丁度、私が宿を取った寺の傍のスパシオと言うホテルを出た。折りから二月初めであったから、そこから寺の門まで僅かに一町ばかりの間ではあったが、山の上は身を切るような寒さだった。あたりはまだ殆んどまっくらで、空には星が冷たそうにきらめいている。

寺の内は森閑としている。ところどころにももされたかすかな蠟燭の光りをたよって、だんだん奥の方へすすむと荘厳な祭壇がある。この祭壇を囲んで、何れも黒い衣を裾長く纏い、頭のいただきを円く剃り、黒の鉢巻のような頭巾を冠っている老若の僧侶たちが朝の勤行にいそんでいる。祭壇には大きな蠟燭が幾つともしてあるので、暗い寺の内にこのあたりだけがぼんやりと絵のように浮き出ている。そしてその蠟燭の光りは、祭壇の丁度上の天井の三角形に仕切った四面の壁に、ジョットオの筆になったフランシスカン派の教義を象徴した三つ——貧、貞操、服従と外に、聖フランシス礼讃の壁画をおぼろげに照している。すべてがこの寺にふさわしい情景である。

朝の勤行の終わったのは七時近くであった。私は一人の年老いた僧侶に頼んで、更に寺の二階の大広間の壁に描かれたジョットオ筆の有名な聖フランシス伝の壁画を見せて貰うことにし

た。壁画はすべて二十八個。二階に上ったときには、あたりがまだ薄暗かったので、よくは見えなかったが、画面の前を行きつ戻りつしているうちに、細長い窓から漏れてくる朝の光りでだんだんにはつきりと見えるようになった。壁画はところどころ剝落しているが、その簡素でどこか稚拙な筆致は、この聖僧の生涯を描くに適わしいもののように思われた。

やがて私は、寺を辞して、寺の前の広場に出た。すっかり夜は明け離れている。目の下にはアッシジの町が見え、町から山へうねりかねて来る道々には、冬枯れの中に、淋しく糸杉の立っているの見える。町のあなたは西の方へるかに展けたウンブリアの平野で、その尽きるところに、雪をいだいた連山が朝日に照りはえていたのも又なき望めであった。

(昭和四年)

## ゴルキイを訪う

藤森 成吉

二月、ナポリへ上陸した翌日、知り合いのイタリア人Sが宿へやって来て、これからゴルキイを訪問にゆこうという。

私は少しちゅうちよした。なぜなら、もう一人同行してくれるはずのロシア人の歯医者の子が、急用が出来て来られなくなったというから。(この歯医者はゴルキイの親友で、もと長い間革命運動をやり、革命後一度警視總監にまなつた男だが、ボルシェヴィキと合わずにイタリアへ逃げて来ているのだという。)

私は別に紹介状など持っていない。わざわざソレントまで出かけて(ゴルキイは今、南イタリアの風光明媚で有名な海岸ソレントにいる。ナポリへあがるまで、私は彼がカブリ島にいたのだから思っていた。カブリで彼は「母」を書いたのだそうだ。)もし彼が外出中だったり、又会ってくれなかったりしたらつまらない。実は前夜サンカルロのオペラを観に行つて寝坊したため、もうソレントゆきの便利な蒸気船はない。自動車で陸路を曲つて伝つてゆくと、片道